minoh わっと

「わっと」は当協議会の愛称です。
人権ってなに？の「What」と人権の輪が「わっと」
広がってほしい願いが込められています。

# 箕面市人権啓発推進協議会 ニュースレター

ニュースレターVOL.24
2019年　3月　発行

〒562-0014　大阪府箕面市萱野１－１９－４
箕面市萱野中央人権文化センター内
TEL/072-722-2470　FAX/072-734-6509
E-mail　jinken-jimu-minoh@silk.ocn.ne.jp
http：//wat-minoh.sakura.ne.jp/

## 東日本大震災義援活動 2018（2018.11.23～11.25）

東日本大震災から８年が経ちました。。箕面市人権啓発推進協議会（人権協）では、被災地での人的交流や啓発学習会の実施、各種カンパ活動などを通した支援・救援の取り組みを継続しています。

本年度は、2017年４月、一部避難指示解除になった福島県浪江町と2016年４月以降避難指示解除になった南相馬市小高区に滞在して、聞き取りやフィールドワークをしました。５年間にわたり「復旧」や「復興」という言葉から切り離され、今だ行方不明者の捜索活動・救助活動もできていない、そして、朽ちていく被災した家屋を見ているしかない、そのような、人のいないまちから「何もしないで『大変だ』ではなく、何かしてから『大変だ』と考えたい」と、まちづくりに関わり続ける方々に出会いました。

人権協の事業として６回目の義援活動になります。訪れる度に新たな出会い、新たなつながりができ、支援し続けることの大切さを感じます。

津波に呑込まれた浪江町立請戸小学校。
避難指示区域にあり、そのままで８年が経過しようとしている。

## 東日本大震災から７年 ～初めての被災地訪問～

会長　岡本克己

昨年５月に人権協会長に就任され、初めて活動に参加されての感想です。

１１月末の連休期間を利用して福島県双葉郡浪江町、南相馬市小高区、宮城県気仙沼市大島を訪れました。

１日目、宮城県仙台空港に到着、まず教えてもらった当時の津波の高さを確認に行きました。空港の建物にブルーのラインでしっかり記されている津波の高さを見た時、当時テレビ画面を通じて見た仙台空港をはじめ三陸地方を襲った津波の破壊力のすごさを改めて思い起こしました。

空港からはマイクロバスで高速道を一路南下し双葉郡浪江町に向かいました。途中から高速道路に放射線量の表示が現れ改めて福島第１原発の事故に伴う放射線による地域汚染の問題解決が非常に困難な状況に置かれていることを実感しました。浪江町役場についてNPO法人「コーヒータイム」の橋本百合子さんに迎えていただき会議室で昼食、その後私たち一行は橋本さんに町内の案内をはじめ様々なことを教えて頂くこと

になりました。昼食のあとは役場の敷地内にある仮設商店街を訪れ、そこから町内の状況を見させてもらうために車で移動することになりました。浪江町は帰還困難区域から一部解除されましたが接している隣町の双葉町は依然とし　解除されていない状況にあります。各家、家の建物は原型を留めていましたが草木は伸び放題の荒れた状況が目の前にありました。

「人のいないゴーストタウン」、帰りたいのに帰れない我が家、わが町の何とも言えない静けさ、家屋が無事で草木も生きている（？）のに車を降りて見ることも困難な状況、放射線がもたらした見えない、においもない原発事故のもたらした惨状を目のあたりにして自然災害とは明確に違う異質の災害を実感しました。

一方で浪江町の川に産卵のために鮭が遡上するようになったことや町立体育館で町をあげての文化スポーツイベントを開催する前日準備に取り組む役場の職員さんや学校の先生方、地域の皆さんの笑顔には復興復旧の街づくりに向けたエネルギーを感じ大いに元気付けられました。特に浪江中学校のたった４人の３年生男子が画いた「がんばる」ポスターの意気込みには圧倒されました。

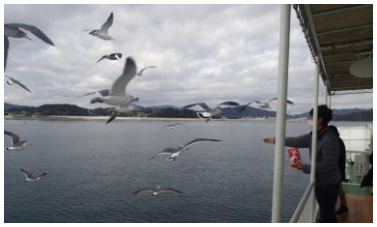
橋本さんにお礼を申し上げ浪江町に別れを告げ宿泊予定の南相馬市小高区に向かいましたが日が落ちて暗くなったこともあり国道の道路案内表示を見落とし車のナビが正しく機能しないというなかでずいぶんと大回りを余儀なくされるハプニングもおきましたが無事到着しました。夕食後に女将さんから南相馬の現状についてお話を聞くことができました。朗らかで楽しい方でいろんな話が聞けました。

２日目の翌朝には女将さんも入ってもらっての記念撮影し、場所を変えて１０時頃から小高の廣畑さんからお話を聞きました。　「震災があり次に津波があって原発がきて、南相馬（小高区）から１万３０００人が消えた」、そんな中避難指示が解除され今では約３０００人の方が戻られたり新しく来られたりして人口増につながっているとのことや、その方々の手で名産品作り等で住民主体の新しい街づくりが進められていることなども併せてお聞きし活力のある小高区が戻る日も遠くないような気がしました。名残を惜しみながら最後の訪問地気仙沼市大島へと向かいました。

仙台を通過し有名な松島を超え高速道をひたすら北上し途中から国道４５号線に入り気仙沼市に向かってひた走りの道中、国道が通る多くの小さな港町に近づき通り過ぎるたびに津波到達点が表示され港の岸壁や防潮堤の工事が急ピッチで進められているのを目にすると復旧に要する時間の長さを思いました。やがて北上川を河口に向かって進むうちに津波によって児童と教職員の多数が犠牲となった大川小学校と多くの住民の皆さんが亡くなり今は更地となっている校区の町の跡地に到着しました。「小学校のすぐ裏は山、なぜ逃げ切れなかったのか」裁判でも争われていたことが頭の中をめぐりました。今はさび

しく残る児童の卒業制作のコンクリート壁画により一層胸が締め付けられました。

夜になって大島に渡るフェリー乗り場に到着少し待って乗船し１５分ほどで到着、少し車で移動し宿舎「海鳳」に入りました。ここの女将さんも豪快磊落な人で食べきれないほどの魚介類を夕食に出して頂きました。ここでは大島の将来像に心をくだき何とかせなと一生懸命になっておられるヤマヨ水産の小松さんにお話を聞きました。「大島の新しい町づくりを考える会」を開いても人が集まらず何かと投げやりな感じの人が多くて」と悩んでおられる真剣さに打たれました。



３日目の翌朝、またフェリーに乗船し甲板でかもめの餌やりを楽しむメンバーもいましたが私は船内からその餌をとりにくるかもめの姿を眺めていました。餌のとり方にも結構個性があっておもしろかったです。１５分ほどで気仙沼港に到着しその足で気仙沼市魚市場に寄りました。ここでも到達した津波の高さに改めて恐怖を感じました。買い物すませ次の目的地、八瀬に向かいました。

ここでは廃校になった小学校の校舎を活用した村おこしの一環で行われている新そばを食させてもらいました。リーダーの方が元校長先生とかでなかなかおもしろい方でした。お話の中で印象に残ったのは消火活動の救援に一番に駆けつけたのが東京消防庁であり、校舎のすぐ上がそのベースキャンプになったことや、同消防庁が使っていた消防車の性能が格段に優れていてびっくりさせられたことなどエピソードを交えながら話していただきました。こちらに来て一番ゆったりしたお昼タイムがすごせました。そばをつくっていただいた村の皆さんにお別れを告げ気仙沼市に戻り仙台空港に向けて出発し、途中、南三陸町の新しく高台に設けられた「さんさ商店街」に寄り、そこから見える防災庁舎を見たとき最後まで非難を呼びかけた町職員、遠藤未希さんの気持ちを思った時観光の買い物で来ている人々とも思いを共有できているのか聞いてみたい衝動にかられました。

７年を過ぎてからの被災地訪問でした。大島大橋や各港の防潮堤、新しい道路の建設に代表されるハード面の復旧復興は進んでいることを感じ取ることができました。

しかし福島第一原発事故による放射線が人々から故郷を奪ったこと、また津波の被災地が整地され高台に新しい家が立ち並ぶ一方で埋まりきらない住居予定地を見る時、被災された方々の境地と新生活への不安を思うとまだまだ道半ばであることを感じましたし、阪神淡路大震災と同じく見かけの復興は成ったとしても１０年、２０年先も風化させてはいけないことと継承の必要性を強く感じ家路につきました。

最後になりましたが、今回も当人権協の義援活動にあたり訪問先やお話をいただく方々のコーディネートを快く引き受けいただきご尽力いただきました坂口さんに厚く御礼申し上げます。

## 「第 33 回　みのお市民人権フォーラム」を終えて

実行委員会事務局長　阿部　一郎

第 33 回みのお市民人権フォーラムは、昨年の 12 月８日（土）、９日（日）の日程で実施いたしました。

12 月８日（土）の全体会では、まずトッキの会と北大阪朝鮮初中級学校の子どもたちによる朝鮮・韓国文化の紹介がありました。わずか 20 分の公演でしたが、450 名にも及ぶ来場者を巻き込んでの合唱と舞台で演じられた朝鮮舞踊の華やかさに、会場からは感嘆の声が上がりました。

その後の講演会では、作家の中山千夏さんが登壇されました。今回のタイトルは、「人権で考え、人権を生きる」です。名子役とし舞台デビューされて長く俳優、歌手、そして作家として活躍されている中山さんですが、講演では自らの半生を振り返りながら、やさしい口調で、まるで来場者お一人おひとりに語りかけるかのように人権について語られました。「人権を英語でヒューマンライツと言います。ライトではなく、ライツと複数形で表現することを、私は長年分かりませんでした。でも、ようやくその疑問が解けました。“人権”とは“人並み”に生きることなんですね。」と語られたことが印象的でした。また、「違う人と交流し、友だちになることが大切。」と締めくくられたことも、中山さんの人生を彷彿するものでした。会場は、いつしか和やかな雰囲気に包まれていました。

講演会終了後には、会場のロビーで、中山さんの著書の販売とサイン会が行われましたが、ここでも中山さんは来場者のリクエストに気さくに対応されておられました。

全体会翌日の 12 月９日（日）には、市内の各会場で、「地方自治」、「部落」、「女性」、「子ども（教育）」、「障害者」、「在日外国人」の６分科会を開催いたしました。いずれの会場も数多くの市民の皆さんが参加され、それぞれの人権テーマに活気のある議論が展開されました。

分科会の参加者は、のべ 334 名に上りました。

## 「第 33 回 みのお市民人権フォーラム」全体会に出演して　！！

（出演者の保護者より）

北大阪朝鮮初中級学校に子どもが通っています。今回、みのお市民人権フォーラムのオープニング舞台に子どもたちが参加しました。朝鮮学校への風当たりが強い中、子どもたちは一生懸命に民族の言葉や文化を学んでいます。箕面の方たちにも子どもたちの公演を観ていただくことができて本当に嬉しいです。これを機に、朝鮮学校の存在を知ってもらえたり、少しでも関心を持ってもらえたりできれば嬉しいです。

今回、このような機会を与えてくださりありがとうございました。

### 参加者アンケートから（抜粋）

≪全体会≫

○人権について、とても深く考えさせられました。
○千夏さんの「権利」という言葉の解釈が、とても新鮮で参考になりました。一人の人として、無意識に人権を軽んじる考えをしていることもあったかと思いました。
○“権利”という言葉について、ゆっくりじっくり思索したことを話していただき良かったです。最後の言葉「違う人と友達になる・交流する」という言葉が印象に残りました。
○「違う人と友だちになること」が、私ができる人権運動だと思いました。
○中山さんの体験の中で感じたこと、大切にされてきたこと、貴重なお話が聞けて良かったです。

【人権フォーラムに対する意見・要望】

○毎年、開催していただきありがとうございます。
○近年のフォーラムの中でいちばん良かったです。
○今後ともがんばってください。
○去年も今年もとても有意義で楽しかったです。第 1 回が始まったときの感激を今も覚えています。箕面が誇るこのフォーラムが、ずっとずっと続く、そんな世の中でありますように！！スタッフの皆さま本当にありがとうございます。

## 【第６分科会に関連して】多文化共生の地域づくり ～大阪北部地震から見えてきたもの～

人権協幹事　箕面市国際交流協会
河合大輔

2018 年６月 18 日、発生した大阪北部地震。あまりの揺れに気が動転した人も多かったのではないだろうか。かく言う私も気が動転して、いつものように子どもを幼稚園に連れて行ったら、先生から「さすがに今日は休園ですよ！」と呆れられた。しかし、誰しも慣れていないことにはどうしてよいのかわからない。

今回の地震で、沢山の外国人市民が避難所に集まった。一番多かった豊川南小学校には 140 名ほどが避難した。国際交流協会では、市役所からの情報を英語、中国語、韓国・朝鮮語などに翻訳して発信する活動と、避難所にいる人たちを巡回して相談に応じる活動を行った。そのなかで、いろいろなことが見えてきた。

その一つは、地震に対する知識のちがいや経験の差だ。例えば「日本では耐震設計されているので、震度６くらいでは最近の家は倒れない」。多くの日本人は、なんとなくそんな風に思っているだろう。しかし、海外に行くとどうだろうか。耐震の基準は国によって全く違うし、「地震が来れば建物は倒れる」ということが当たり前の国もある。はたまた「地震がない」という国もある。避難所では「次はいつ地震がきますか？夜ですか？昼ですか？」といった質問や、「アパートの部屋にひびが入っている。次に揺れたら倒れるのでは？」という相談もあった。「こんなに大きな地震があったのに、どうして日本の人は避難しないのですか？」という声もあった。地震に対する知識や経験は様々であり、怖さも不安の中身もそれぞれなのだ。巡回しながら、そうした不安がやわ

らぐように話をしていった。

もう一つ。地域の日本の人たちと外国人市民の間に壁がある、ということだ。巡回してみると避難している人の多くが大阪大学の留学生とその家族たちだということがわかった。そのなかには日本語を話せる人が結構いた。そのことを避難所を運営している市の担当者に伝えると「そうなんですね！」と驚いた様子。いや、驚くのはこちらだ。もう半日以上、一緒にいるのにどうして話していないのか？また、別の避難所では「外国人の方が避難されているので、通訳に来てください」と呼ばれていってみると、その人はとても上手に日本語を話した。どうも「外国人＝言葉が通じない」といった思い込みがあるようだ。地震翌日の夜、豊川南小学校では 130 名ほどが避難している場で、国際交流協会スタッフがマイクを持って「日本語を話せる人は前に来てください！」と呼びかけた。すると 40 名ほどの人たちが出てきてくれた。それぞれの言語に分かれてもらうと、その場で 10 言語もの通訳ボランティアが集まったのだ。そして運営者から、避難所はボランティアで運営されていること、トイレが汚れてきているので気づいた人が掃除してほしいこと、を伝えてもらった。すると、その後には「私にも何ができることがあれば手伝いたい」とボランティアを申し出る留学生も現れた。「声をかけにくい」という心の声を越えれば、いっしょに避難所を作る側にもなってくれる。市役所の人たちも「こういうやり方があるんですね」ということで、次の日には自分たちで呼びかけてうまくやってくれたようだ。

その後、外国人市民に聞き取りを行うと、避難所に行かなかった人、行けなかった人が沢山いたこともわかった。ある人は恐くて避難所に行きたかったけれど、日本語の情報しかなくてどこに行けばよいかわからず、暗い車のなかで過ごした、と答えた。また、ある人は、ガスが止まったものと思い込み、２週間ずっと水シャワーを浴びていた。日本語教室で話しているうちにそのことがわかり、スタッフが家に行って復旧ボタンを押してあげた。こうしたことは、隣近所や日本人の友人が声をかければ、すぐに解決したことではないだろうか。ある留学生はアパートのとなりに住む日本人のおじいさんがよく声をかけてくれたので、とても心強かった、と話してくれた。また、以前に日本人の友人に「つっぱり棒」というものの存在を教えてもらっていたおかげで、まったく平気だった、とうれしそうに話す外国人市民もいた。

その後、国際交流協会は、災害時には多言語支援センターを設置して、多言語情報の発信や避難所巡回を行う災害時の対応計画をまとめた。また、今回の経験を活かして、避難所での外国人市民への対応をしっかりと行うためのマニュアルづくりを地区防災委員会の皆さんと進めている。折々に外国人市民の皆さんの疑問や不安にこたえるセミナーなども開催してきた。

しかし、それだけでは十分ではない。一人一人が地域でつながり、困ったときに聞きあえ、助け合える関係こそが大切だ。心の壁を普段から低くする努力をつづけなければならない。そういう声かけができるようなきっかけを、それぞれの地域でつくっていってほしい。国際交流協会がそうしたお手伝いをできれば、と願っている。

６月 19 日（火）
午後 10 時頃の豊川南小学校避難所の様子

# 新年互礼会

2019年の新年の事業「新年互礼会」。今年は、2月1日（金）にらいとぴあ21で開催いたしました。例年の土曜日ではなく、金曜日ということで仕事を切り上げて早々にお集まりいただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

人権協会長の挨拶の後、第一部は「東日本大震災義援活動 2018」に初めて参加された岡村直樹さんの「はじめてのフクシマ」の報告でした。

仙台空港に降り立って目の当たりにした「津波到達地点」の表示、福島への移動中の窓からの光景、福島第1・第2原発の事故からの避難の様子、小学校の教員をされている岡村さんには、浪江町立請戸小学校や石巻市立大川小学校の惨状には、特に心を痛めたことなど、パワーポイントを使いながらわかりやすい報告をしていただきました。（岡本会長も初めての参加でしたので、皆さんにお伝えしたいことが多々ありましたが、時間の都合上できませんでした。本紙面 1 ページから3ページに会長の感想を掲載しています。）

第一部と第二部の間には、「ピースサイクリング」の取り組みのについて、子どもたちによるアピールがありました。これは、4月27日から5日間、広島平和公園へ向かって、自転車で走行する取り組みです。「平和について考える、友だちと協力する、自分を見つめる」などの目的を持っての取り組みです。らいとぴあ21に集う小学4年生から6年生15人が参加します。たくさんの経験を重ねてくることと思います。休みごとに練習をしていますので、見かけられましたら声をかけてあげてください。

第二部は、人権協に参集し、人権について、それぞれの分野で活動されている方々の懇親会です。皆さんのお話には、それぞれの思いや願いが籠っていました。時間が足りなくマイクが回らなくて話足りなかった方もいらっしゃったことと思います。申し訳ありませんでした。

一昨年からの市内での差別落書き事件、ますます巧妙になるネット上での差別事象、虐待等々、人権侵害の事例は絶えません。私たちここに集う全員は「どのような差別事象も絶対に許さない」の決意を込めて、そして、穏やかな1年であるように願いを込めて、仲野相談役の一本締めで閉会いたしました。

ご参加いただきました皆様、本当にありがとうございました。参加費の一部は「ゆめ・風基金」に寄付いたしました。

## ジェンダーかるた 2019 改訂版を作成中！

男女協働参画啓発研究部会

2018 年は、財務省のセクハラ問題と政治家たちの相次ぐセクハラ発言、「ＬＧＢＴカップルは生産性がない」発言、医学部入試での女子一律減点など、まだまだ男女平等には程遠い社会の現実が露呈しました。

一方、性暴力やセクハラ被害を告発する「#MeToo」運動が海外から起こり、日本でも「怒れる女子会」「ちゃぶ台返し女子アクション」などＳＮＳを通じてつながった女性たちの動きが増えてきました。関西にも日々のモヤモヤやしんどさをテーマにワークショップやデモをする「怒りたい女子会」があります。怒りたいけど誰にどう怒ったらいいのかわからない、モヤモヤするのに怒れない、だから「怒れる女子会」ではなく「怒りたい女子会」というらしいが、第 33 回みのお市民人権フォーラム「女性」分科会の講師を引き受けていただきました。そして、その場で参加者から言葉になってたくさん出てきたモヤモヤを共有し共感しました。

家事は年中無休、休みほしい／正月は主人方の家へ行くばかり。嫁、休めず／お茶出しは女の仕事／政治家、官僚のトップは男性ばかり。なぜ変わらない／なんでリタイヤした夫が夕食を作らず待っているだけ？／子どもが熱出したりで迎えを呼び出されたりするのはいつも母親／子育て、介護はただちゃうで／テレビで美人はちやほや。不美人は…／酒席でちょっと仲良くなったら勝手に触ってくる／家事はママの仕事でしょう？／休日は何にもせずぼーっとする夫／制服にも多様性を／トイレのマークが気になる／おまえは嫁だから親のことはよろしく／「だんなさん」というコトバ気持ち悪い／「女性差別ってまだあるんですか？」と若者（女子）に真顔で聞く／女は産め、働け、輝けと言われたら違うんじゃないか。輝きにくい社会なのに／自分よりもずっと年上のオジサンに「イイ年だね」と言われる。オマエ何歳やねん！などなど。

部会では 2015 年に初めて「ジェンダーかるた」を作りました。今回は、多くの方から出してもらったモヤモヤをヒントに新たなカードを加え、初版をより充実させるよう「ジェンダーかるた 2019 版」に取り掛かりたいと思います。

## キムチづくり教室

在日外国人問題啓発研究部会

本部会では、1 月 18 日にトッキの会との合同新年会を開催し、韓国料理（サムギョプサル・ナムル・トックスープ・ビビンバなど）を手作りし、今年のスタートを祝いました。

そして、2 月 17 日に恒例のキムチづくり教室を実施しました。部会委員とその家族等 20 人ほどの参加があり、2 日前から塩漬けしてくださっていた白菜にヤンニョムを根元から丁寧に塗り込んで出来上がり。出来たての白菜キムチとわかめスープで昼食を摂りながら、交流を深めたり、今後の活動について話し合ったりして和やかなうちにお開きになりました。帰りには、ヤンニョムの作り方や白菜の塩漬け方を教えてもらって帰る人もいました。我が家の味にチャレンジされることでしょう。

## 久々の部落問題学習
## 学習会「私からはじまる部落問題」に参加して

同和問題啓発研究部会

箕面市の市民会館で開催された「私から始まる部落問題」と題した府民啓発講座に参加しました。平日昼間の開催だったため、参加者は２０名程度と少なかったのですが、参加者が５つのテーブルに分かれてワークショップを行う参加体験型の人権啓発講座で、私にとっては久々の部落問題学習でした。。（人権協から７名参加）

「被差別部落の生活や教育の状況は、全体と比べてほとんど変わらない。〇か×か？」「住宅の購入や入居で被差別部落を避けるという人は、５人に１人いる。〇か×か？」などの課題についてテーブルごとに意見を出し合い、講師が解説する手法がとられたが、私が知らないことも幾つかあったので、大変勉強になりました。

〇か×か？の答えにも被差別の実態が示されましたが、意見交換でも世間の差別意識を助長しかねない意見もあり、更なる啓発活動の必要性を実感した学習会でした。

## 映画「こんな夜明けにバナナかよ」を鑑賞して

障害者問題啓発研究部会

障害者部会で鑑賞した映画「こんな夜更けにバナナかよ」を、紹介します。

主人公の鹿野靖明（1959 年生まれ）は、難病の筋ジストロフィーを患い、体で動かせるのは首と手だけ。在宅福祉制度など皆無に等しい 80 年代に、自らボランティアを集め自立生活を始める。そこで出会う人々との、笑いあり涙ポロリのワガママ（我がまま）痛快実話映画。

原作
「こんな夜更けにバナナかよ　筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち」著者／渡辺一史（文春文庫刊）　ぜひご覧ください。

（ＨＰより）

世界人権宣言大阪連絡会議連続学習会

## 「外国人労働者の受入拡大にあたって」に参加して

今、外国人労働者受け入れ拡大を目指す改正出入国管理法に基づいて４月からスタートする新在留資格「特定技能」に関する学習会でした。日本の外国人労働者のこれまでの経過や外国人技能実習制度の現状、新たな外国人労働者受け入れと「共生のための総合的対応策」など、多岐にわたる内容でした。最後の「今後に向けて～職場で、地域で」では、外国人労働者は地域の隣人、多言語化の配慮の必要性、支援する、されるだけの関係ではない、「〇〇で働く△△さん」といえるような顔の見える地域住民との関係、人と人とのつながりをつくりことが人権を大切にする共生社会になるのだとまとめられました。

（事務局）

※この連続講座は毎年さまざまな人権課題について、テーマごとに実施されています。詳細等は事務局までお問い合わせください。大阪府人権協会のＨＰにも掲載されています。

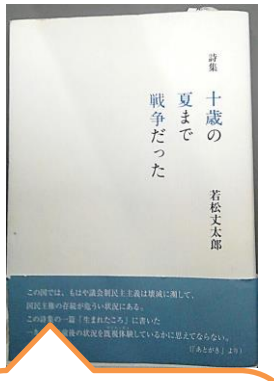
# 総会予告と書籍・DVD の紹介

**2019 年度　総会**

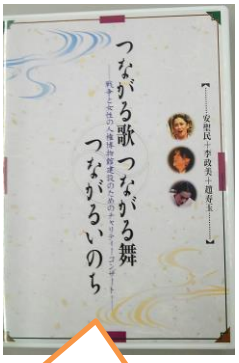
・日　時　　５月 25 日　１５：00～１７：30
　　第1部　総会
　　第2部　講演会・学習会

役員・幹事の皆様はご予定をお願いいたします。
第２部は、たくさんの方のご参加をお願いします。

**寄贈本と新しく購入した DVD･･･事務局に置いています。活用してください。**




**「十歳の夏まで　戦争だった」**（寄贈本）
1941 年 12 月 8 日朝、その時目にし、耳にしたことがらをなぜ記憶したのか。
1945 年 8 月 15 日正午、記憶したことがらをなぜ再生したのか。




**「つながる歌・つながる舞・つながるいのち」**
朝鮮にルーツをもつ、日本で生まれ育った 3 人の女性アーティストの、自らの体の中に受け継がれたものを大切にしながら、魂を解き放つ表現活・・・。

**「老いを生きる」**
明日は我が身かも知れない認知症の問題と不幸にも家族から受ける虐待。
現代社会を描く感動の人権教育啓発ドラマ！

**「こんにちは 金泰九（キムテグ）さん」**
**ーハンセン病から学んだことー**
中学生の目から見たハンセン病問題。２度と繰り返してはならない悲しい歴史から金さんとの交流を描く。

【編集後記】
　本年度も箕面市人権啓発推進協議会「わっと」のニュースレターを 22 号、23 号、24 号を発行いたしました。人権協の本部事業だけでなく、各部会、関係団体の取り組みを紹介することができましたのも、お忙しい中、原稿を頂けた皆様のおかげです。お礼申し上げます。
　今後とも人権感覚を磨き、一人ひとりが当たり前に自分らしく生活できる社会をめざしての活動を記事にしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。